

群 教 七	G08 - 03
	令5.284集
	商業

# 自ら考え、根拠をもって 表現することのできる生徒の育成

——協働学習とミニ授業を通して——

特別研修員 高山 駿

## I 研究テーマ設定の理由

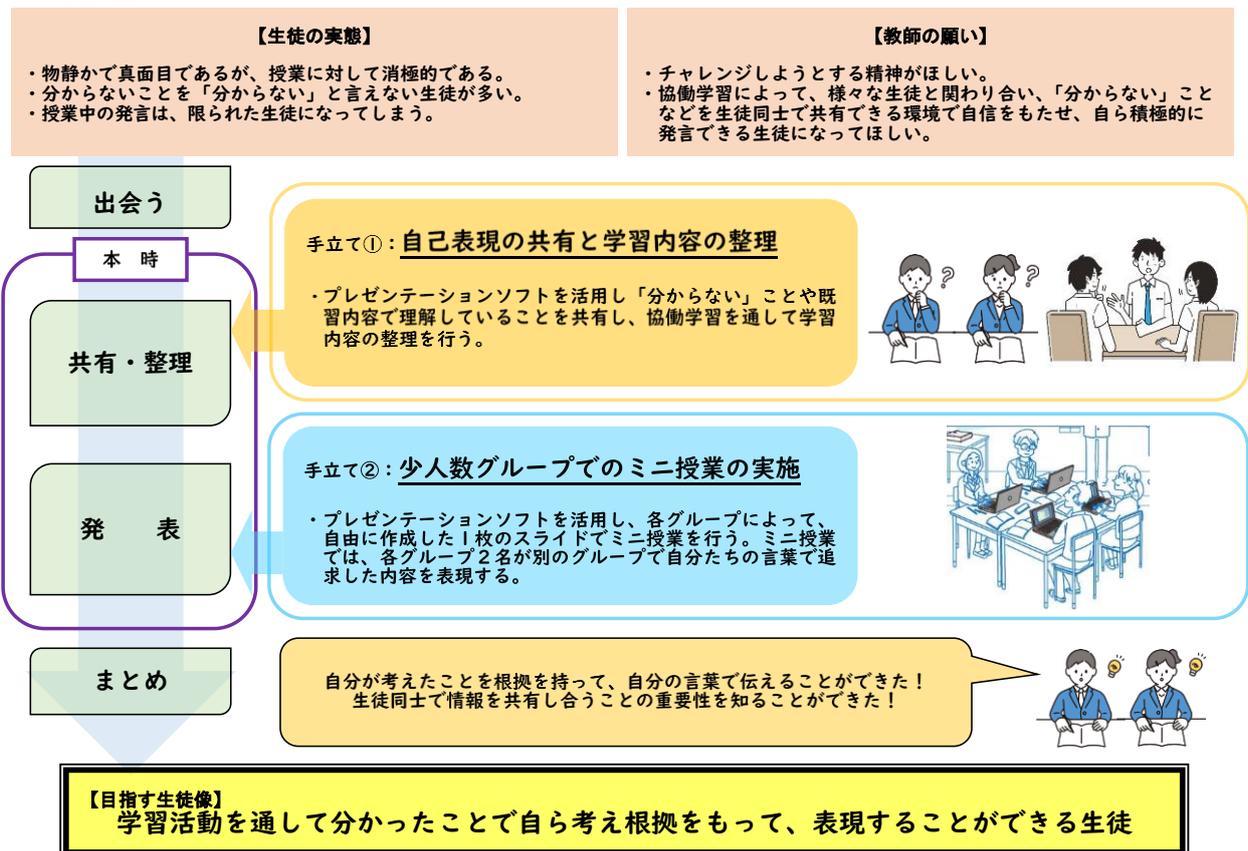
高等学校学習指導要領（解説）の改訂の経緯では、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」と示されている。また、高等学校学習指導要領（解説）の商業科の目標（3）「職業人として必要な豊かな人間性を育み、よりよい社会の構築を目指して自ら学び、ビジネスの創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養う。」とあり、具体的な態度とは、「他者との討論により課題の解決策の考案などを行う学習活動、他者の考えに耳を傾け、対立する意見であってもそれを踏まえながら自己の考えを整理し伝える学習活動」と示されている。

本研究の対象は、第2学年商業系の総合ビジネス科を選択した40名である。物静かで真面目であるが、分からないことを「分からない」と言えない生徒が多く、授業中の発言は限られた生徒が中心になっている。

そこで、授業展開の中の協働学習によって、様々な生徒と関わり合う中で、「分からない」ことを生徒同士で共有できるICT環境を活用し、自己肯定感を高めることで自らが表現できることにつながると考え、本テーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

商業科目において、ICTを活用しながら、自ら考え、根拠をもって表現することのできる生徒の育成を目指し、次の二つを手立てとして考えた。

### 手立て1 自己表現の共有と学習内容の整理

プレゼンテーションソフトを活用し、普段は簡単に言葉にできない「分からない」という表現や既習内容で理解していることなどを共有する。そして、生徒自身で理解していることを整理し、生徒同士でコミュニケーションを図りながら、協働して一つのスライドに学習内容をまとめる。

### 手立て2 少人数グループでのミニ授業の実施

手立て1において、少人数グループで協働して作成した学習内容のスライドを活用し、他のグループに対してミニ授業を行う。ミニ授業では、受講者からの質問や疑問点を受け付け、受講者がミニ授業者の評価を行う。

これまで行ってきた一斉指導や問題演習に重点を置いた授業展開では、小テストや補習などを行うことで理解度の把握や個別指導を行ってきた。しかし、小テストでは高い点数を取るが、定期テストにおいては高い点数を取ることができず、理解していない生徒への指導には難しさを感じていた。生徒が「分からない」と思っているにもかかわらずそれを表現することができない生徒のために、自己表現ができる機会を用意し、協働学習を通して生徒の自己肯定感を高め、主体的に学習に取り組めるための指導の工夫をしていきたい。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- 手立て1については、普段は理解していることを簡単に言葉にできない生徒たちが、プレゼンテーションソフトを用いることで、簡単に自己表現する姿が見られた。また、協働学習において、学習内容の理解を把握し、生徒同士でコミュニケーションを図りながら既習内容の復習と調べ学習による内容の整理を行うことで、自らの考えをもち表現できるようになった。
- 手立て2については、リフレクションシートの「ミニ授業があることで、相手に分かるように説明しよう自分の方がより理解しようとした」等の記載から、他者に自らの言葉で伝える場面を設けることによって、理解を深めることに有効であることが分かった。
- 手立て1、2を通して、リフレクションシートの結果から、多くの生徒たちが前時までの学習内容の理解について「自信があまりなかった」という回答に対して、授業終了後には大きく改善し、「理解ができるようになり、自信をもつことができた」と回答していることから自己肯定感が高まったことが分かった。また、授業のめあてに対する回答においても、協働して作成したスライドに「自分なりの表現ができた」とあり、手立てが有効であることが分かった。

### 2 課題

- 手立て1、2の取組において、情報を集め自ら考えて整理することで、作業時間が掛かり、導入やまとめの時間が少なくなってしまう、リフレクションシートを行う時間を確保することが難しかった。そのため、より明確な時間設定が必要である。
- 授業展開や使用するアプリケーションソフトが同じことで、生徒たちに「慣れ」が出てきてしまい、学習内容を整理・表現する場面において、「分からない」や「授業したが忘れた」と簡単な言葉でしか表現しなくなってしまった。グループの変更やどの部分が「分からない」かなど、教師側が質問を少しずつ投げ掛けることが必要である。
- 授業の題材によっては、実生活に関わる課題を考察させることができず、前時までの内容を答えるまでに留まってしまうため、題材に工夫が必要である。

## 実践例

### 1 単元（題材）名

「第18章 新株予約権」（第2学年・2学期）

### 2 本単元（題材）について

本単元では、純資産の意味を理解するとともに、適切な会計処理を学び、貸借対照表を作成できるようにする。また、純資産は株主からの出資金や企業の利益などから得られた資金であり、第三者への返済義務がない自己資本とも呼ばれており、企業の安定性を把握する上で重要な項目となっているため、生徒自ら整理・分析し、表現することで、会計処理についての理論と実務を関連付けさせて、会計情報の効果的な活用に責任をもって取り組む態度を養うことにもつながる単元である。

目標	(1) 純資産の意味と各項目の内容をおおむね理解し、適切な会計処理を行うことができる。 (知識及び技術)	
	(2) 純資産の会計処理の妥当性、実務における課題を発見し、課題への対応策を考察できる。 (思考力、判断力、表現力等)	
	(3) 純資産の意味と各項目の内容について、自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む。 (学びに向かう力、人間性等)	
評価規準	(1) 純資産の意味と各項目の内容を理解し、適切な会計処理を行うことができる。 (知識・技術)	
	(2) 純資産の会計処理の妥当性、実務における課題を発見し、課題への対応策を考察することができる。 (思考・判断・表現)	
	(3) 純資産の意味と各項目の内容について、自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む態度を身に付けている。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	○純資産の意味と分類について理解させるとともに、資本金の増加・減少を実務に即して理解する。 ・教科書、プリント、問題集を活用し、資本金の増加、減少に関する取引を仕訳する。
	第2時	○資本剰余金に関する取引について実務に即して理解する。 ・教科書、プリント、問題集を活用し、資本剰余金に関する基本的な取引を仕訳する。
	第3時	○利益剰余金に関する取引について実務に即して理解する。 ・教科書、プリント、問題集を活用し、利益剰余金に関する基本的な取引を仕訳する。
	第4時	○自己株式に関する取引について実務に即して理解する。 ・教科書、プリント、問題集を活用し、自己株式に関する基本的な取引を仕訳する。
	第5時	○新株予約権に関する取引について実務に即して理解する。 ・教科書、プリント、問題集を活用し、自己株式に関する基本的な取引を仕訳する。
	第6時	○純資産の取引を読み解き、会計処理をするために、適切な仕訳ができる。 ・演習用プリントで取引を仕訳する。
追究する	第7時	○自己株式に関する会計処理の妥当性を知り、実務における課題などを協働学習によって考え、表現する。 ・グループでプレゼンテーションソフトを活用し、現在の知識を整理、共有する。 ・教科書、プリント、タブレット端末を活用し、調べ学習を行う。 ・グループでプレゼンテーションソフトを活用し、整理・まとめを1枚のスライドに作成する。 ・別グループに対して、整理、まとめた1枚のスライドを活用し、ミニ授業を行い、授業者に対して評価を行う。
	第8時 (本時)	○新株予約権に関する会計処理の妥当性を知り、実務における課題などを協働学習によって考え、表現する。 ・グループでプレゼンテーションソフトを活用し、現在の知識を整理、共有する。 ・教科書、プリント、タブレット端末を活用し、調べ学習を行う。 ・グループでプレゼンテーションソフトを活用し、整理、まとめを1枚のスライドに作成する。 ・別グループに対して、整理、まとめた1枚のスライドを活用し、ミニ授業を行い、授業者に対して評価を行う。
まとめる	第9時	○貸借対照表（一部）を完成させ、純資産が経営状況に与える影響を考える。 ・プリントを活用し、基礎的な問題を処理する。 ・問題集を活用し、身に付けた既習内容を活用し、学習内容を定着させる。 ・純資産の金額によって、経営状況に与える影響を各自考え、自らの言葉で表現する。

### 3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全9時間計画の第8時に当たる。純資産の取引については、前時までに純資産の意味と分類、純資産の各勘定に関する取引についての仕訳を理解させ、基礎的・基本的な知識を身に付けた。本時では生徒が既習内容の理解を確認し、協働学習によって既習内容の復習・整理を行い、ミニ授業へとつなげていった。グループは4名で、生徒個々の特性を配慮した上でグループ編成を行っている。

本研究では、生徒の「分かった」や「分からない」を表現させ、協働学習によって、思考・判断・表現し、自ら考え、根拠をもって表現できる生徒の育成をねらいとしており、具体的には次の二つの手立てを設定した。

#### 手立て1 自己表現の共有と学習内容の整理

プレゼンテーションソフトを活用し、普段は簡単に言葉にできない「分からない」という表現や既習内容で理解していることなどを共有する。そして、生徒自身で理解していることを整理し、生徒同士でコミュニケーションを図りながら、協働して一つのスライドに学習内容をまとめる。

#### 手立て2 少人数グループでのミニ授業の実施

手立て1において協働して作成した学習内容のスライドを活用し、生徒同士で別グループを探してミニ授業を行う。ミニ授業においては、受ける側の生徒が授業を受けて、疑問点などを質問し、ミニ授業を行った生徒に対して3段階の評価を行う。

### 4 授業の実際

本時の学習課題の設定は、新株予約権の会計処理の妥当性、実務における課題を考え表現することで、既習内容の知識・技術を活用し、協働学習を通して、自ら考え、整理させ表現させることである。生徒は前時までの理解度の確認、協働学習、ミニ授業、振り返りの順で学習に取り組むこととした。

#### (1) 導入

導入では、本時の目標と既習内容を教科書・授業プリントで振り返りを行い、協働学習を行う上での注意点を説明した。また、授業開始時の理解度と自信を問うため、リフレクションシート(図1)に回答させ、協働学習へと移行するよう指示した。

上記で選択した授業において、現在の内容について授業開始前の段階での理解度はどのくらい? \*

1 2 3 4

わからない ○ ● ○ ○ よくわかっていた

上記で選択した授業の授業開始時の自分の学習に対する自信はどのくらい? \*

1 2 3 4

自信がない ○ ● ○ ○ 自信を持っていた

図1 リフレクションシート

#### (2) 展開

展開では、プレゼンテーションソフトを活用した協働学習に取り組んだ。スライド1枚目(図2)では、授業課題に対する自分自身の現在の理解している内容を簡潔かつ率直に表現させた。教師は、前時までの学習内容で理解している内容だけでなく、「分からない」も表現できるよう、それが恥ずかしいことでも、間違いでもないことを伝えた。自己表現が苦手な生徒でもICTを活用することで、分からないことや理解していることを簡単に表現する様子が見られた。スライド2枚目(図3)では、グループで内容の復習、整理を行った。教科書、授業プリント、インターネットを活用し調べ学習を行い、設けられた質問項目に対して、「この質問項目は私が完成させるから、後で確認してほしい」「質問項目の妥当性って何だろう。分からないから教えてほしい」などの発言があり、グルー

本時の課題：新株予約権の会計処理の方法と妥当性、実務における課題はなに？

※「わからない」ことや現在の自分の知識をどんなことでも表現してみよう！

- 権利行使期間内に行使すればいい株式
- 株式の交付を受け取ることができる権利
- 純資産の勘定科目
- 発行に当たり対価を受け取る

図2 スライド1枚目

本時の課題を整理していく！

- ◆新株予約権とは？  
権利行使することにより、さだめられた価格で株式の交付を受けることができる。権利行使期間内に行使しないといけない。過ぎたら権利を失う。株式と引き換え。
- ◆会計処理の方法の妥当性は？  
新株予約権から払い込まれた金額を「新株予約権」(純資産)で処理し、発行時の払込額と行使時の払込額(行使価格)の合計を資本金勘定に戻す。そこで起きた失効分は新株予約権勘定から「新株予約権戻入益」(特別利益)勘定に戻す。
- ◆新株予約権のメリットはある？  
資金調達の手続きと機会が増えることで安心資金の調達より資金調達ができる。敵対的買収への防衛手段となる。
- ◆実務における課題(デメリット)は？  
発行する会社から見た場合、当該会社が資金調達目的で新株予約権を発行したとしても、権利行使期間内に株価が上昇しなければ新株予約権者が新株予約権を行使せず資金調達が達成できない。

図3 スライド2枚目

でコミュニケーションを図りながら活動する姿が見られた。スライド3枚目(図4)では、白紙のスライドに、各グループが自由に表現し、ミニ授業で使用するスライドを完成させた。スライド2枚目、3枚目を作成する注意点として、情報を正確に読み取り判断すること、自分の言葉で表現することを指示した。教師は支援者として、協働的な学習が円滑に進められるよう留意した。各グループでどのように整理するか話し合い、主体的に取り組む態度が見られた。「私は新株予約権のメリットをまとめるよ」「図形などを挿入すると見やすくなるかな」などの発言や、教科書や授業プリントを振り返るグループ、インターネットから情報を得ようとするグループもあり、グループごとに創意工夫をして取り組んでいた。スライド完成後、チャットを活用し、各グループで組み合わせを行い、スライドが完成したら、ミニ授業に移行することとした。生徒主体でミニ授業の組み合わせを行うことで、各グループが意識的に時間配分を考えながら協働する様子が見られた。

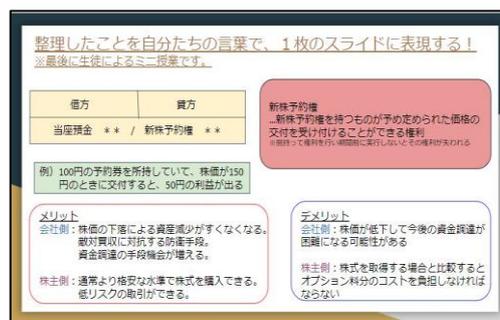


図4 スライド3枚目



図5 ミニ授業の様子

スライド3枚目を活用したミニ授業(図5)では、グループの半分が別グループの半分と組み、一つのグループとなりミニ授業を行った。生徒は自分の言葉で分かりやすく伝えようとする姿が見られた。また、自らが説明を行うことで、一人一人が責任をもって取り組むことができていた。

### (3) まとめ

アンケート作成ソフトを活用したリフレクションシートで本時の振り返りを行った。リフレクションシートの結果(図6)より、協働学習やミニ授業の効果を生徒が実感している結果が得られた。また、今回の課題に対して、協働学習やミニ授業を通して理解が深まり、自ら考え、根拠をもって表現できている生徒が多くいた。

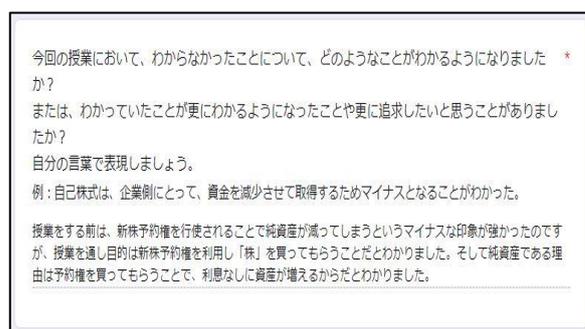


図6 リフレクションシート

## 5 考察

本研究では、ICTを活用し、協働学習を通じた学習とミニ授業を通して、根拠をもって表現することのできる生徒の育成に取り組んだ。その理由として、商業科の授業が教師主導の一斉指導や問題演習に重点を置いた授業展開が主流であり、生徒が協働学習を通して理解を深め、自ら考え、根拠をもって表現することが難しいと感じたからである。生徒が主体となって学習に取り組み、自己表現ができる授業を展開するためには、既習内容を基に生徒の理解を深められるような授業づくりが必要である。

本研究における「手立て1 自己表現の共有と学習内容の整理」では、生徒がグループの中で主体的に取り組む態度が見られ、生徒同士でコミュニケーションを図りながら思考・表現することで、学習の理解を深めることができた。プレゼンテーションソフトの共有機能を活用することで、生徒一人一人が容易に自己表現し、協働で作成を行う活動となった。「手立て2 少人数グループでのミニ授業の実施」では、自分たちの言葉で相手に分かりやすく伝えようとする姿が見られた。ミニ授業を受ける側もより理解を深められるよう傾聴する姿が見られた。授業開始時では、自信がない生徒が多く、自ら考え、根拠をもって表現することは難しかったが、これらの手立てを用いたことで自己肯定感が高まり、自ら考え根拠をもって表現できるようになった。今後も継続して本研究を活かした学習指導を続けていきたい。